

2025年1月の議事録

日時	2025年1月30日 19:30~20:30
場所	芦屋浜 センタービル3F 会議室
参加者	青木(アステムD棟)、友田・宮城(アステムC棟)、渋谷(浜風第4住宅)、松尾(浜風第5住宅)、末友(新浜町住宅)、三浦(ラ・ヴェール芦屋II)、北山(ラ・ヴェール芦屋III)、山口(アステムA・B棟)、藤井(芦屋浜第2住宅)、深谷(緑第二住宅)、大田・野村(潮見南)、植木(潮見第二住宅)、長谷川(潮見第三住宅)、春木・谷(南浜1街区)、川島(市議)、内藤(個人) 合計19名
議題	<ol style="list-style-type: none">パイプライン年次報告書2024(全世帯配布)芦屋市指定ごみ袋の使用(ナッジを利用したチラシ)1月のワーキング・グループの報告ごみ削減の考え方その他

はじめに

埼玉県で発生した陥没事故について報告がありました。この事故は、本市のパイプラインと類似した状況で発生したものの、埼玉の管は直径4.5メートルと大きく、本市の50センチのパイプラインとは規模が異なります。しかし、本市のパイプラインも45年以上が経過しており、老朽化が懸念される状況です。特に、パイプの厚みが9ミリだったのが、現在1mmしかない部分もあるために、耐久性に不安があるとの指摘がありました。

1. パイプライン年次報告書 2024(利用者の会全世帯配布用)

芦屋市のパイプラインの現状を住民に周知するため、7,500部の資料を印刷し、各戸に配布することが報告されました。そのうち500部は、芦屋市の窓口で新たに転入する住民向けに自治体が配布します。なお、印刷費用は12万円で、住民からの会費で賄われています。また、来週の木曜日には、全議員および市長へ資料を直接配布し、読んでもらうよう働きかける予定です(市長も含めて済)。

• パイプラインの劣化と雨水の影響

過去の調査で、大雨(100ミリ以上)の際に輸送管内に水が浸入していることが確認されました。以前は200ミリの降雨で発生していた現象が、現在で

は100ミリで発生しているため、パイプラインの劣化が進行している可能性が高いと考えられます。

特に、雨水とごみが混ざることで、輸送管内に堆積物が溜まり、除去が困難になる状況が生じています。この実態を住民に伝えるため、写真付きの資料を作成し、今回の年次報告書では配布することになりました。

- マナー違反のごみ投棄の現状と対応

2024年度に発生したマナー違反のごみ投棄について報告がありました。具体的には、以下のような不適切なごみが確認されています。

- 大量の雑誌(特定の有名人の写真付き)
- 大量の段ボール
- 石・鉄製品
- 大量の衣類
- 新聞紙(湿気を含むと輸送管内で詰まりの原因になる)

違反投棄を行った住民が特定できるケースもありましたが、注意を促すことの難しさも指摘されました。住民への直接の注意に対して、「指摘される筋合いはない」と反発されるケースがあったとの報告も記述しています。

- ごみ投入口の適切な使用について

投入口の適切な使用方法について、以下の2点が特に重要であると説明されました。

- 投入口の鍵の正しい操作

- 鍵の摩耗により、途中で抜けることがあり、その結果次の住民が鍵を差し込めない事例が発生。正しく回して鍵を抜くことが必要。

- ごみ袋の結び方の工夫

- 結び目を上向きにすると引っかかる可能性があるため、横向きにするのが望ましい。

これらの問題は毎年発生しており、注意喚起を強化する必要があります。

- パイプラインの維持管理にかかるコストについて

パイプラインの年間維持費は約2億円以上で、市のごみ処理予算(15億5,000万円)の約16%を占めることが報告されました。ごみ量が全体の**7.8%**しかないにもかかわらず、維持費の割合が大きいことから、費用対効果の面で課題があると指摘されました。

また、市の条例ではパイプラインの使用期限が 2039 年および 2051 年までと定められていますが、南海トラフ地震や異常気象などのリスクを考慮すると、予定通りの運用が可能かどうかは不透明であるとの懸念が示されました。

2. 芦屋市指定ごみ袋の使用(ナッジを利用したチラシ)

芦屋市では、適切なごみ処理を促進するため、指定ごみ袋の使用を義務付けています。しかし、未だに不適切な袋を使用するケースが見られるため、より多くの住民に指定袋を利用していただくための取り組みとして、「ナッジ理論」を活用した啓発チラシを作成して、今回の年次報告書に添付しています。

ナッジ(Nudge)とは、人々の行動を自然に良い方向へ導く手法です。例えば、公共の男子トイレで「ハ工のマーク」を設置し、狙いを定めさせることで清潔を保つ工夫がされています。同様に、今回のチラシでは、「市指定ごみ袋を使うことでスムーズにごみを捨てられる」ことを視覚的に伝え、住民が自主的に指定袋を選ぶようなデザインを採用しました。

今後も、行動経済学の視点を取り入れた啓発活動を進め、住民の意識向上を図っていきます。

3. 1月のワーキング・グループの報告

近年、パイプラインの維持・管理に関する議論が停滞する場面が増えているため、2025 年度からファシリテーター(会議進行役)を導入し、合意形成をスムーズに進めることができることが決定しました。

導入の目的

- ・ 議論を円滑に進める(利用者・自治体双方の意見を整理し、建設的な話し合いを促す)
- ・ 合意形成を加速する(意見の対立を防ぎ、具体的な解決策を導く)
- ・ 意思決定の効率化(問題の優先順位を明確にし、実行可能な対策を迅速にまとめる)

今後の課題

- ・ ファシリテーターの選定基準の策定
- ・ どのように会議を進めていくかの運用ルールの設定
- ・ 利用者と自治体の双方が納得できる合意形成の進め方の検討

4. ごみ削減の考え方

A) 5R の推進

ごみ削減を進めるため、「5R(リフューズ・リデュース・リユース・リサイクル・ロット)」の考え方を取り入れることが重要です。

5R	内容
Refuse(リフューズ)	不必要なものを買わない・もらわない
Reduce(リデュース)	ごみの発生を減らす(詰め替え用の利用など)
Reuse(リユース)	使えるものは繰り返し利用する(フリマ・寄付など)
Recycle(リサイクル)	資源ごみを分別し、再利用する
Rot(ロット)	生ごみを堆肥化する

B) 特に、日本のごみ削減政策では、真ん中の 3 つ(リデュース・リユース・リサイクル=3R)が強調されていますが、海外では「Refuse(買わない)」や「Rot(堆肥化)」も含めた 5R が推奨されています。

B) 雑紙の分別強化

芦屋市では、雑紙の分別が不十分な家庭が多いことが課題となっています。現在、雑紙を適切に分別している家庭は一部に限られており、大半が燃えるごみとして廃棄されている状況です。これにより、リサイクル可能な資源が無駄になり、焼却コストの増加にもつながっています。

以上